

統一

第一百七十一號



目次

日蓮上人の警句
 解脱の二方面
 国力護持論
 勤儉の美風
 別勸請問題に就て
 村上如水君に答ふ
 報道欄
 廣告

本多日生
 田中智學
 小林一郎
 吉田賢龍
 紀野俊耀
 井村日威

日蓮上人の警句

本多日生 口述

石川顯隆 筆記

(朗讀)

返す返すも御意得の上なれども、未代の有様を佛の説せ給ひて候には、濁世には垂人も居し難し、大火の中の石の如く且くはこらふる様なれども、終には焼擡けて灰となる、賢人も五常は口に説て身には振舞ひ難しと見ぬて候や、甲の座をば去れと申すぞかし、若干の人の殿を造り落さんとしつるに落されずして、はや勝ぬる身が穩便ならずして造り落されなば、世間に申すこぎこひでの然こぼれ 又食の後に湯の無きが如し(崇峻天皇抄一節)

(1)

先日は、日蓮上人の主義に關する警句中、道義の總要、國家に對する觀念、父母師匠に對する報恩、夫婦間の真情、衆生恩の大義等に就て御話致しましたから、今日は其の續きとして、第一に信仰、第二に安心、第三

に人身觀と云ふ順序で時間の許す限り御話する考であります。

第一に信仰であるが、信仰は實に宗教の生命でありまして、如何に深遠なる教義を有する宗教でも、若し熱烈なる信仰が缺乏すれば最早宗教とは云はれません、學問としては立派なものであつても、宗教としての生命はそこに亡びてしまふのである、世人の多くが認め居る通り、我が佛教は深遠なる教義を有する點に於ては實に世界第一であつて、たとへ如何なる科學や哲學の眞理と比較するも決して遜色あるものではありませぬ、然しながら宗教として必須缺くべからざる信仰の點に至ると餘程眞面目に考究せんければなるまいと思ふ、云ふまでもなく佛教は學問ではなくて宗教であります、然して古來非常な熱烈なる信仰を有して幾億の人類を救済し來つたる一大宗教であります、我等は此の點を能く心得て益々信仰の方面の發揮に勤めんければなりません、日蓮上人の警句中にも、この信仰に關する慈訓は最も多く示されてあります、持法華問答

抄に

暮れ行く空の雲の色、有明方の月の光りまでも心を
備ふす思ひなり、

と仰せられてあるが、これは信仰に關しての警句中、
我々に活ける信仰をよめしになつた、誠に有がたい
御教訓であります、我等は將來信仰に就て斯様な方面
を充分發揮せんければなるまいと思ひます、我宗の信
仰に就ての心得方は種々あるが、第一に我等が信仰の
本源は實在常住の佛陀であつて、我等は如何なる時に
も此の本佛に向慕渴仰し、此の本佛と感應道交するこ
とを忘れてはなりません、こゝに我宗の信仰の源泉は
あるのである、然るに上人の門下にして往々此の本佛
の實在を輕視して、只徒らに御經を讀誦したり、或は
固陋なる儀式に於て木佛書像等を禮拜することのみし
て居て、直ちに活ける佛陀に觸るゝの妙諦を逸して居
るが、是等は大に注意せんければなるまいと思ひます、
畢竟御經の尊いのも、木像等の有がたいのも、この活
ける本佛の靈力が加はるからであると云ふ點に充分留

在しても宗教としての生命は恐らく滅亡を免かるゝこ
とは出来まいと思ふ、

そこで我等がこの御佛を心に浮ぶるに、只固陋に一定
したる本佛の前とか、或は寺へ参つた時とか云ふ時
ばかりに限つて居る様に心得て居るならば未だ活ける
宗教の信仰を味識して居ないのである、神力品に「若
は園中に於ても、若は林中に於ても、若は樹下に於て
も、若は僧坊に於ても、若は白衣の舍にても、若は殿
堂に在ても、若は山谷曠野にても」と示されてある如
く、行住坐臥如何なる所に居つても、我等が一念本佛
を追慕するならば、そこに親しく佛陀を直觀すること
が出来るのであります、持法華問答抄の聖語は、この
信仰の要諦をよめしになつたのであります、則ち我
等が只本佛の前とかあ寺へ参つた時ばかりでなく、暮
れ行く空のあざやかな雲の色を眺むる時、或は有明方
の月の光りの如き崇高なる自然の美に打たるゝ時、そ
こに本佛の柔靉の御影を感ずるのであります、更に之
を他の物に移して云へば我等が爛漫たる花を見、微妙

意せんければなりません、この事はよく判つて居る様
であつて其實明了に意識されて居ないのであります、
上人が「十方三世の諸佛の微塵の經々は皆壽量品の序
分なり」と仰せられて、此の品を尊重なさつたのは、
壽量品の中に無始實在の佛陀が居まして、恒久不易の
慈光を垂れて我等を救ひ玉ふ事が説かれてあるからで
あります、この御佛は時間て申せば三世常住の御化道
であり、廣がりて云へば十方法界の御設化である、又
所化は一切衆生とあるから、如何なる女人でも、悪人
でも、一視平等に愛し玉ふのであります、凡そこの宇
宙法界に生きたし生けるものは如何なるものでも、こ
の本佛の愛子でないものはありません、法華經の信心
とは我等が直ちにこの慈佛と親しく感應道交して、そ
こに人生の苦樂を超越したる無上の妙味を感ずること
であります、佛敎が宗教としての第一義は實に茲に存
するのである、これは勿論日蓮宗ばかりが重要視する
のみでなく凡ての佛敎徒が皆こゝに注目せんければな
らん、若し然らざれば佛敎は將來學問としては世に存
なる鳥の音を聞て直ちに佛陀の有がたさを心に浮ぶる
のであります、上人の身延御書を拜讀すれば、上人が
其の山に接し玉ひて莊嚴の美に打れ玉ふと共に親しく
佛陀の靈光と感交して御出てになる有様が誠によく知
られるのである、則ち「後には峨々たる深山をびえて
梢に一乗の葉を結び、下枝に鳴く蟬の音溢く、前には
湯々たる流れ溢えて實相眞如の月浮び、無明深重の關
時、法性の空に雲もなし」と仰せられて實に限りなき
宗教の妙味が御文章の上に活躍して居ります、總て信
仰の状態を斯の如く心得るのが活ける信仰である、こ
の眞狀を僅かな言葉の中に支とめてあるのが、警句と
して最も尊い點であらうと思ひます、
次に同じ信仰に就ての警句は王舍城御書に
弓の強くして弦よはく、太刀つるぎにてつかふ人の
臆病なるにて候べし、あへて法華經の御失にては候
べからず
と仰せられてありますが、これも我等がよく心得て居
らんければならん事である、この意味は法華經は佛陀

の最上の御教へであるから、この旨をよく心得て至誠
に信仰するならば御利益は疑ひなく来るものである、
然し信ずる方の我々が經文の意を誤解して居たり、信
仰が薄弱であつたりするから御利益がないのであると
云ふ事を、弓と弦、劍と仕人、とに譬へて仰せられ
た御言葉であります、法華經を弓に譬へ信心を弦に譬
へて、弓の強さだけ信心の弦を張るならば間違なく御
利益は来る、又法華經は名劍の如きものであるが、如
何なる名劍でも之を仕人弱くしては何にもならない
此旨をよく心得て、正しく熱心に信仰せなければなら
ぬと仰せられた、有難たい警句であります、又録内三
十九四條抄に

日蓮は幼少の時より今生の祈なし

と仰せられた寔に崇高な警句があります、云ふまでも
なく法華經の御利益は、現世安穩、後生善處とある如
く現當二世に涉つての救済であります、然るに上人の
御信仰は自分の身に就て今生の祈なしと仰せられたの
である、我等はこの御言葉の中に尊い教訓のあること

無限の佛陀と一致結合する信仰は火も焼く事能はず水
も凍はす事能はざる眞に金剛不壞の境界であります、
上人のこの警句は吾人に此の信仰の妙味を御示し下さ
つた尊い垂語であります、次に松野抄の一節に
愚者の持たる金も智者の持たる金も、愚者の燃せる
火も智者の燃せる火も其の差別なきなり、但し此の
經文の心に背いて唱へば其の差別あるべき也

と仰せられてあるが、是も誠に有がたい教訓でありま
す、これは或る人が上人の唱へさせ給ふ御題目の功德
と我等如き無智の者の唱へ奉る功德と何程の相違があ
りますかとの間に對して解り易く、金と火とに譬へて
仰せられたのである、則ち一圓の金は智者が持つても
一圓なれば、愚者が持つてもやはり一圓である、決し
て持ち人に依つて價の變るものでない、又火の光りも
其の如くて如何なる人が燃しても其の燃せる人に依つ
て明暗の別はない、法華經の功德も丁度是れと同じで
たとて如何なる大學者の信仰でも亦一文不知の老嫗の
信仰でも其れより来る所の功德利益に少しも相違のあ

を知らねばならぬ、上人の信仰はこの人生より名譽と
か、地位とか、財産とか云ふものを求むる心は少しも
なかつたのであります、我等は此の點を深く考へんけ
ればならぬ、全体我々が宗教に依つて要求する所のも
のは、斯様な淺薄な一時的のものではない筈である、
故に我々が現當二世の利益を祈つても、一面にこの上
人の信仰の深意を味讀することが最も肝要でありま
す、この現在の國家とか、父母とか、家庭とか、財産
とか云ふものは皆變遷すべき一時的のものである、隨
つて是等の安泰を祈るとか祈らんと云ふ事がさほど
宗教に重要なものではない、宗教極究の大目的は其の
奥に永久不變の考へを教ふるものである、永久の考へ
とは則ち我等有限なる者が無限の佛陀と一致結合して
そこに限りなき法悦の妙味を感ずることであり、
此の點が宗教として最も尊い所であり、有限のも
のは如何なるものでも我等の絶對の力らになるもので
ない、例へば今茲に地震とか火事とか起るならば忽
ち滅亡してしまふものである、然るに宇宙の本主なる

るべきものでない、然しながら只佛陀の眞心に背き經
文の意に違ふならば其の差別は甚大であると仰せられ
た警句であります、(以下次號)

解脱の二方面

文學士 小林一郎君 講演

私の日蓮上人に對する研究は、極日も淺いので、上人
を知らざるのみならず、上人信仰の源泉たる法華經に
於ては、猶更解りません、夫れ故諸君に對して講演を
致すことは出来ないものであります、然るに清水龍山君
より急に依頼でありまして、何んでも善いから頼むと
云ふ御語で止むなく諸君の清聴を汚すに至つた次第で
あります、
講題は仰山であります、内容は大した事はありませ
ん、唯自分は何故に上人を渴仰するに至つたか、又何
故に本會に入會致すに至つたかと云ふことを、白狀す
るに過ぎない、然し白狀とも題せられませんか、解
脱……と申した譯であります、

序論として、私が如何にして上人を研究するに至つたかを御話するならば、自分の青年時代などは、殆んど斯ふ云ふ事には餘り關係の少ない方であつた、私は横濱で生れて八王寺で育つた、父親は法律家であつたから、殊に風景な方で、宗教などと云ふものは殆んど縁の遠い方であつた、私は五六歳の頃は、何んでも總理大臣になると云ふて居つたといふことでありました……自分で能く覺えませんが……十一二より十八九迄は、病氣勝て、幾度か死に瀕したこともあつて、何だか病氣にばかり成つて居るものですから、物事が詰らない様な心持があつて、正月でも御祭りでも餘り面白くとは思はなかつた、十三の時に小學を終り、それから後は、漢學をやつて居て、此の間に小説も澤山讀みました、此處に御出席の小笠原君の著はされた小説なすは、大概讀んだ、此の時代に私の精神上に對する影響は、これが斯と確言は出来ないが、理窟は何様にもなるから、理窟ではドーもだめだと思つた、此の頃に佛教演説も諸方で聞いた、田中智學君の演説も聞

いた、然し唯面白い位なもので影響は無かつた、若し影響と申すなら、先づ小説と病氣位でせう、十七八歳からは俳句に興味を持つて、俳句を多く詠んだ、或る人から俳句では芭蕉が一番良いと云ふことを聞いて、芭蕉一代集を最も多くの興味を以て讀んだ、今でも能くは解らないが愛讀して居る、此の當時自分に感じた事は……芭蕉の意であるかどうか知りませんが……世の中といふものは、物足らぬがよい、淋しいのが善いと思つた、十八歳の時に、共立學校に入つて英語など類に研究したが、二十一歳頃迄は非常に近松の作を讀みました、此の間に高等學校へ入らんとして、獨逸語を學びます内、自分は貧乏ですから、何か單語の豊富な面して値の廉い書を探めようとした處が、或る人が其れは、バイブルが善いと云ふて呉れたので、大學へ行く迄バイブルを讀み続けましたが、此間に大分影響を受けて、初めは字を學ぶのが主であつたのが、大に基督教が好きになつた、大學在學中屢々會堂へ出入して、クリスチャンらしくなつて來た、後

又嫌になつた、并は何となく人間が、意地わるく、妙にヒネクンて行々様に思ふたからである、是れは今から思ひば、基督教には猶太あたりの陰氣な嫌な風が附いて居りし故であつたでせう、

ソコで是に代る者を求めやうとした、或る時英學の先生で富田といふ人が、日本佛教の僧侶中日蓮は一番偉大な人である、彼は他の高僧の様に時の爲政者の保護に藉て宗教を宣布したのではない、官に頼みず堂々と平民的に自己の主張を貫いたのだと云ふ話をした、當時日蓮上人は偉磊かと思ひ始めた、是れ實に上人に興味を持ち始である、此の席には如何な方が御出か知りませんが、本會は別に御世辭を云ふ必要がない……私は小供の時は役人が嫌いであつた、是れが子の心に上人を思ふに至つたのでせう、實は其の平民的と云ふに惚れたのである、

大學で哲學を専攻しましたが、在學三年位で仲々哲學が能く解るものではない、夫れて常に自分は彼のトルストイ翁が言つた様に、哲學と云ふものは如何に難ふ

べきかといふ疑問の方法は教へるけれども、決して疑問を斷ずべき學問ではないと思ふた、こんな考で哲學を研究し、學校を出てから、友人柴田君に會まして日宗大學に教鞭を執るに至り、時々上人の事を聞き、又御遺文をも拜讀しましたが、餘り價値をも認めなかつた、亡られた本間僧正にも、御遺文中では何處が一番尊いのですがと尋ねたところが、何處かと云ふことは無い、讀めば何處でも有り難いのだと言はれたことがありました、ソコで居る内に漸々と上人が何となく貴く思はれて好になりました、

是れから、何故に上人を愛するか、其譯を告げたいと思ひますが、單純に言へば好だから好だと申しても善い、能く人が哲學を研究すると宗教に冷淡になると云ひますが、現今の科學界の思想は決して宗教を退歩せしめるものではない、二十世紀の哲學思想は、決して宗教と衝突するものではない、若し衝突すると見るならば唯一方のみを見て居る僻見である、今日の思想の趨向は、一元論に歸着せんとして居るものである、昔

は二元論で、神と物、肉體と生靈、現實世界と理想といふ様に二元的であつた、要するに十九世紀末より廿世紀に至る今日の思想は、皆一元的に趣いて居る、即ち現象即本体の主義で、此の吾人の立て居る現實を輕視せざる思想である、今日自然主義などが盛んに唱へられるのも一元的に成つて來た爲めでないかと思はれます。

此の科學哲學の一元的思想は、宗教の信仰を決して破るものでなく、却て發揮する様に思はれる、それは現象界の如何なる物にも價值と不思議とを認める思想であるからである、昨日も或る植物學者が來て、花といふものは一の生殖器で、美ではないと言ふて居つた、是れも見方に依るので、生殖器の様なものでも、自然に奇麗に美しくなつて顯はれて居ると見れば宜いと思ふ、昔の人は解らないと云ふ、今日の人は何でも分つたくと云ふ、けれども本統に分つて居るのかと言へば、多くは別の名を附けて解つたと言ふて居る、例せば、水は水素と酸素の結合なりと云ふて解つたと

思ふて居るが、唯是れ別の名を附けた迄である、水素と酸素とは何なものかと云へば、ヤハリ解らない、水は水なりと云ふことゝ餘りかわりはない、されば科學知識と云ふものは、不思議の事實を破ることは出来ない唯言ひ換える力があるのみである、故に現象界の上に於ける不思議と眞價とを認めて、神は如何なる處にも居ると云ふ思想は、決して破れない、依て眞の信仰は科學等に依りて破られ可きものでないと言ふて差支はない。

然らば宗教ならば如何なるものでも善いかと云ふに、若し是れが學說ならば眞理さへ合はなれば其れで善いが、宗教はソレは行かぬ、學說は食物の如きもので、惡るい處を取り捨て、善い處さへ食へば善いが、宗教は書の如きもので、一ヶ處マズイところがあれば全轉の構成を破つてしまふからダメになる、随分中には十宗の長を取つて宗教を信するなんと言ふて居る者もあるが、是等は理屈として言ひ得べきものであつて、實際上、そんなことで信仰が成立つものでない、信仰

は吾人の身心の満足安樂を得るにあるを以て、學說を撰取る様に彼此取り交せる譯には行かぬ、故に部分的眞理を含むと言はんよりは、全轉として完全圓滿なものでなければならぬ、今日大乘非佛説論などの事も、予には殆んど無關係である、佛説非佛説よりも、眞理なら善いと思ふ、佛在世の口づからてなくとも、佛の思想が滅後に發展したものなら其れでも差支ない然し朱子が孔子の説を註した様に孔子の意に反する様では非ないが、根があつて其れから芽が出、蔓が延びたのなら構はない、智識欲からは、大乘佛説非佛説の研究も遂げねばならぬが、信仰からは、どうでも善い、見渡すところ今日は日本でも世界各國でも、思想が動搖して居つて殆んど踳越が附かぬて困まる、ソコで予等の如き智識の程度では、偉人を通して認めるが宜からうと思つた、是れ予が日蓮上人の如き偉大な人格を依怙として安立の地を求めんと欲した所以である、今の分ては此の信念は容易に横へられる様な事は無い積りであるが、然し生涯どこ迄も信仰の友と思はれては

困る、

私が安心とか又は心の中に何らかの光明を得たいといふ事は、何から來たかと言ふに病氣から來たと思ふ、我國の王朝時代から鎌倉時代を通觀しても解るが、宗教の必要時代と云ふものは、二元論の思想か、出來上る時にあると思ふ、即ち善と惡とを並び置いた場合が最も苦なるもので、金でも有つたり無かつたりする場合が苦で、初より無いなら苦といふ者は少ない、人間でも大なる不親切に逢へば却て心の中に置かないか、少し不親切なのは大に憎くい様なものである、猶太人は確に二元論で、神と人と云ふ思想なので又希臘人も物質と物質以上の大なる力を信して居たから二元論である即ち人と云ふものは神と獸との結合したものと云ふ自覺が苦であつたので之を脱せんとしたのである、能く宗教心は婦人に多いと云ふも、女の方が男よりも活動が少くて、善惡兩方の刺激が多き故であらう、どうしても婦人は男子の如く盲目的に苦樂を忘るゝ様な活動は無さ、

二元論に至れば、苦を解脱するの道が二つになる。一つは、他の方を見ずに自分を偉器ものだと思ふて、此處に全力を注げば解脱を得られるといふので、克己派の哲學者が賢人になりて自由を得ると云ふは即ち是れである、今一つは人はツマラス者と思ふて解脱を得る、トウマス哲學に人はドウセ詰さらぬ者である偉器といふた處で詰らぬ中で偉器のて、畢竟ツマラス者であるといふてを捨て、解脱するが如きである、禪宗の是心是佛の如きは前者で、淨土眞宗が吾人はツマラス者であるから彌陀を頼むと云ふ如きは後者である、之を自力他力と見ても宜からう、西洋人の語を以て言ひば、主觀的宗教客觀的宗教であつて一は自分の心に神を捉らへんとし、一つは自分以外に神を求めんとするもので予は前者は主觀的解脱、後者を客觀的解脱と呼ばん、予を以て見れば、ドナラも解脱し得べからずと思ふ、吾人は日本人である、自分丈が偉器くなつたつて其れで善いとは言へぬ、國民をも發達させねばならぬ、總之に自分丈偉器といふ機では世を進ませる事は出来な

い、去りとして親鸞や基督の機に、自分は詰らぬと言ふて天國や極樂のみを夢想して、マ一期やつて居る其の内は彼の世へ行けば立派になると云ふ機でも困まる、殊に此の現世界が困まつて了ふてはないか、私が田舎に居つた時分に某漢學者があつて、車て前の人を馳け振けることはいけないと云ふて車てブラ／＼行く人があつた是れでは行かぬ、予は主客何れの解脱もいけぬと思ふ、其れは何れも消極的で現實を逃げ出す主義だから行かぬ、即ち主觀の方は心の中へ逃げ客觀の方は他世界の中へ逃げるのだ此の現世界には逃げ主義の解脱が多くなつては困まる例へば借金に苦んでる者が苦を忘れんとして、或る者は酒を飲んで借金取も響の聲と観じて苦みを忘れんとし、又或る者は笛を吹き書を描いて苦悶を忘れんとするが如きで、前者は客觀的の浮かれ主義で、後者は主觀的に心の中に一時逃げ入るのである、けれども醉が醒めれば苦みが出て、書や笛をやめれば直に苦を思ふて来る、故に眞に借金の苦を免れんとするならば、根

本的に借金を返すに如くはない、故に現實界に在て立派な者になつて借金を返へすなら積極的仕事である、吾人は現世界が善くて而して日々の仕事の中に深意を見出し、天國淨土を此世に見出す事が出来なければ甚だ詰らぬ話で、畢竟吾人の存在は、次第に善き方に向け得る爲に働くのてである、どうしても此の世を立派にして行ける方法でなくてはならぬ、戒體即身成佛義の中に此の法華經を信すれば斯なると云ふ約束が説かれてあるが、予は其の約束を信じて今は居る、

のも能く觀察すべきことである、百姓は百姓、と言はれるが辛い、それであるから教家が自分ばかり倍つた振りにして汝等罪ある者よなどと言はゞ、寧ろ失敗である、此の點に於て上人が「佛になるならば、共に佛に成らう地獄に行くならば共に地獄に行かう」とて自分も共に人間の仲間になつて、指導獎勵せられたのは、實に積極的解脱法である、解脱の二方面といふことが三方面になつたかも知れませんが、其れは何れでも……本日は私が日蓮上人を渴仰するに至つた動機と共に本會へ入會して載いた次第だけを申上げた譯であります、(完)

消極的解脱の中にも、主觀的の方は、教家が妙な名譽心に動かされて宗教家振つて困まる、客觀的の念佛宗の如きは、彼のクーパーが選議者よ汝は自分の謙遜てふことを誇らざるかと言ふた機に、自分が詰さらぬと言ふことを誇つて居るが、これでも困る、

講題の意は、國力で法を護持するの意で、是れは本門三大秘法中、本門戒壇の中に於て、四種の護持を明す中の一箇條である、天地法界の全軀を其儘戒とすることは、大乘の初門たる提謂經にすらも明すことである

國力護持論

田中智學君 講演

日蓮上人は人間として人間を導いた、一人の苦は妙な處にあるもので、貧民は食ふことよりも貧民と思はれて押し附けられるのがつらい、鮫ヶ橋の幼稚園なぐの子供は、却て先生の辨當より甘いものを食べて居る

い、去りとして親鸞や基督の機に、自分は詰らぬと言ふて天國や極樂のみを夢想して、マ一期やつて居る其の内は彼の世へ行けば立派になると云ふ機でも困まる、殊に此の現世界が困まつて了ふてはないか、私が田舎に居つた時分に某漢學者があつて、車て前の人を馳け振けることはいけないと云ふて車てブラ／＼行く人があつた是れでは行かぬ、予は主客何れの解脱もいけぬと思ふ、其れは何れも消極的で現實を逃げ出す主義だから行かぬ、即ち主觀の方は心の中へ逃げ客觀の方は他世界の中へ逃げるのだ此の現世界には逃げ主義の解脱が多くなつては困まる例へば借金に苦んでる者が苦を忘れんとして、或る者は酒を飲んで借金取も響の聲と観じて苦みを忘れんとし、又或る者は笛を吹き書を描いて苦悶を忘れんとするが如きで、前者は客觀的の浮かれ主義で、後者は主觀的に心の中に一時逃げ入るのである、けれども醉が醒めれば苦みが出て、書や笛をやめれば直に苦を思ふて来る、故に眞に借金の苦を免れんとするならば、根

が、法華經の戒體なるものは、本佛の因行を言ふので、其の因行の顯はれたものが國土である、春は花咲き秋は美しき實を結ぶ所が、其の儘戒のすがたである、之を精神的に解すれば、美は善て、善は正である、此の善にして正なる力は、經に久修業所得と説いてある所の、悠久無限なる本佛因行果徳の蓄積力の發動であつて、之を本佛縁起と稱する、此の縁起の當轉が即ち戒である、一切萬有起滅の當相に對して、無意義なるものを有意義に道義的に解するのが法と云ふもので、一切のものが、有るべき様に有るは法て、此法を規矩準繩として、一つの形式の中に集めて示したのが教て、斯うせねばならぬ彼せねばならぬと約束的に示したのが戒である、法界の當轉は悉く本法縁起の發動であるから、一切皆本佛的に働かねばならぬ、ソ一するには法界活動の必然的規範たる法に服従せねばならぬ、法に服従するは法を擁護するにある、是に於て四箇の護持を明す、

第一は、法施護持て、法を説きて眞理を奉行して、此

りて、是等の固有の向上力一切を發揮した、夫れから次に趣味力、趣味が無ければ國民性が劣等になるから是非必要じや、次は風土、山川の美は温和なる氣候と共に物の調和力を持つて居る、國民の智能、無比の國體、是れ等一切を包含したものが國力である、

此の如き國は能く尊無過上の大法を護持するに最も適して居る、

法の本来の目的として本化上行菩薩を召し出して、末法の弘通を爲さしめたのは、一切衆生一切世界を救はんが爲めである、其の之を救ふ方法は、一切の擾亂を削いて居る所の思想道徳を最上の善法に依て之を整正革刷するにある、是れ其の豫て附屬せられたる所の法華經を標準として一切を批正統一する所以である（以下次號）

の法を護持する、第二は財施護持、是は財力を以て法の爲に盡す、第三は身施護持、是は献身的に身を以て法を護持する、四條金吾、鏡忍坊、工藤吉隆の如きものである、第四に國力護持は國力を以て法を護する、此四個の中で初の二は大乗的で、身施は法華述門の意、第四は實に本門壽量品の實義である、

國力護持に就て、法華經と國家との關係を説かんに、法が國を護し國力が法を護するは、三大秘法鈔に言ふ所の王法佛法に冥じ佛法王法に合するの意である、國力とは何であるか、是は國家の力全體を言ふ、之を列擧して見ると、國體の精華として世々厥の美を成せる民性即ち忠孝尚武の氣風、國の建設力即ち財力殖産力、破壊力即ち兵力、教育即ち向上力で、神武帝が穴居の古風を廢して木材を以て家を造ることを獎勵し、凡そ民に利あるものは改めて用ゐよと詔りを下されしが如き、又崇神天皇の時に四道將軍を置き、苟も王化にまつらわざる者あらば之をなびげよと勅命ありしが如き、殊に今上陛下の時に至ては、開國進取の國是とな

勤儉の美風

（二月二十日千道經會本納支部發會式講演の大意）

千葉中學校長 吉田賢龍
文藝學士 成島毅舟筆出

今日は有吉知事のお談がある筈でありましたが、昨夜突然用事が出来まして私に其代理として出張し何かお話をせよとのとてあります、何にせよ私も突然の事故珍敷話も腹案も別にありませんから、平素自分の思ふてゐる事に就てお話をしてみやうと思ひます。

其處で、此尙風會は私は戌申の詔書に依りて起りたるものか否かは儘かに存じませんが、兎に角此詔書の意を飽達實行せんとして起つたのではあるまいかと思ひますから、聊か其詔書に就て一言致しませう。

抑々此詔書の中に「勤儉」と云ふとありますが之は天皇陛下が深く御珍念あらせらるゝ所ありて御發布に相成りました事と存じます、何故かと申せば我日本國は日清及び日露の戰爭以來、非常に國威を海外に發揚し世界の一等国に加はりました、此一等国と申しま

すのは、假令ば他の國に於て或事件が起りたりとせんか、此一等國の協賛を経なければならぬ、例せば支那に於て一の事件が發りたりとせんか、之を解決するに其支那に關係ある一等國の承認を得なければ、何事も出來ないのである、又現今の巴爾幹半島に於ける問題にしても英國とか佛國とか獨逸とか、此一等國の關係ある國が承認を與へねば何事も解決する事が出來ない、是則ち英、佛、獨は一等國であるからであり、今吾國は此優勢なる資格を有する一等國の地位を得てをるのであるが、然し世界の一等國に對して、日本國の富の程度を觀察する時は、同じ一等國でも其點に於ては實に痛心の至に堪えせん、乃ち

▲日本國現在の富の程度 は本邦に於ける總ての財産即ち動産と不動産とを合して百十七億圓餘であり、而して本邦の人口は五千二百五萬餘人であり、此富を人口に對して平均に分ちて見ると、一人前の所持する富は百二十三圓となる、此を彼の英國と比較するに英國では一人前の所持する富は三千百三

十圓である、更に之を米國と比較すれば、米國は一人前四千三百四十圓であると申しますから、如此富の程度は他の一等國に比して非常なる差異があります、次に

▲日本國民の有する収入の程度 は如何程であるかと云ふに、此には種々の見積方がありまして一定せんけれども、大体極く少く見積りましたのが一人前一年の収入三十圓にして、極く多く見積りましたのが六十圓であり、此六十圓の説は少しく多い様に考へますが、兎も角も之を六十圓として之を他の國に比較する時は極めて少収入であることが分ります、即ち英國人一人、一年の収入は三百六十圓、米國人は一人四百四十五圓であり、収入の上から於ても非常なる差があります、次に

▲日本國農産物の状況 は如何といふに、日本國は一年に五千萬石の收米があります、一昨年の如きは四千九百二十萬石餘の收米がありました、今之を人口五千二百五萬人に配當すると、先づ一人の食料を一ケ

年約一石と見積る時は、既に其食料に於て尙三百五十萬石の不足を生ずるの結果になる、由來吾國は農業國であると稱してゐるも、日々缺くべからざる吾人の食料に不足を生ずる如ては、到底其優勢を誇ることは出來ないでせう、次に

▲日本國輸出入の程度 に就て論じましても亦甚しき大差を生ずるのである、即ち日本國は日露戰爭已後に及んで輸出入共に非常なる活潑の進歩をなして年々八億圓以上の輸出入がある、一昨年の如きは實に九億圓以上にも達してゐるけれども、之を歐洲の諸國に比すれば伊太利亞は十六億四百萬圓、佛蘭西は三十六億圓、オースタリヤは四十三億圓、獨逸は四十五億八千萬圓、イギリスは九十七億三千萬圓であるといへば、日本國に超過してゐるとは甚しいものであります、而して日本に比較すべき國はスイツツル、スペイン等の國であるが、此等の諸國は一等國にあらずして、極めて資格の劣等の方であります、次に

▲日本國工業の程度 に就て調べて見るに此工業の程

度は何によりて知るかと云ふに、是は石炭の消費高によりて其程度を計算するのであるが、此石炭の消費高を知らんとするには、先づ石炭の採掘高を知りて夫より輸出高を調査して之を差引して残りたる石炭の數が即ち消費高となるのであります、此方法に依りて調査しますると、日本國の現在の消費高は僅かに六百萬噸しかない、之を歐洲中に於て最も多くの石炭を要せずして工業を爲す國たる彼の佛國に比するも彼は尙三千八百萬噸を消費するのである、實に其他の國々に比較したなら本邦の如きは、殆どお話にならぬのであります、已上陳述せし如く本邦は農工商等總ての富に關する問題に於ては未だ其劣等たるを免れない、が然し其資格に於ては既に一等國であるから、歐洲の一等國と同じく總ての事を爲さねばならぬ、此點より考ふる時は日本國上下臣民は既起一番、多大の注意と奮勵とを要するのであります、是に於てか 天皇陛下は夙に此點に敏慮を留めさせられ、勤儉の二字を一般國民に奉体せしめ、之を實行せしめんと御思召遊ばされたのであり

ます、然れども吾々國民は此詔書を拜讀して、其富の如きは到底列國と比肩し難きのみならず、本邦の有する二十億圓の國債に至つては、最早絶時的に及ばずなどと自暴自棄してはならん、今之に關する一の實例を舉ぐれば、彼の鐵血宰相ビスマークが佛國と大戦争をなして終に大捷を得た、此時ビスマークは心密に思ふ機佛國をして再び立つ能はざらしむるには、此機を利して莫大の償金と最要の地を取るに加ずとして、佛國より五十億フランとアリアサスの地を得た、之に依りて他國人は萬聲一口に曰く、最早佛國は再び立つ能はず自ら廢亡すべしと、然るに豈計らんや佛國は此適當なるビスマークの要求が動機となりて終に五十億フランの償金を返却したのみならず、其後僅かに六十年間にして、今日の如き優大なる佛國あるに至つたのであります、是に由りて之を思ふに、國民全体が一致結合の決心と共同の力とは、實に雄大なるものであります、故に吾々國民は設令二十億圓の國債があつても、左様驚くには及ばない、即ち佛國民の決心と奮勵の力とに

鑑みて、一層の勤儉努力をすれば可いのであります、又此の勤儉の事に就て例せば、佛國の如きは非常なる勤儉にして、日本の如きはまた、贅澤な方であります、又獨逸人にしてもなか、勤儉であります、然らば勉強の方は如何といふに獨逸人は日本人の三倍已上も勉強し、米國人の如きは獨逸人の三倍も勉強するといへば米國人は、恰も日本人の九倍已上も勉強することになり、如斯勉強の程度に大差を生ずる原因は、時間を徒費するや否やにあるので、西洋にては些少の時間たりとも、徒に之を使用せぬ、此事に至りては遠く日本人は歐州人に及ばない、深く注意せねばなりません、殊に尙風會々員の如きは……次に注意を要するは

▲吾々國の儉約であります、即ち無益な事に腦を費やさぬとて、劣等なる肉體上の情慾とか、或は人を怨むや嫉妬とか、或は経過した事柄を幾度も追思するが如き、如此事を除去したならば、吾人は非常なる利益を得るのであります、彼の野邊の草花を見よ、常に

風雨をものともせず平然として無邪氣であるから、如何にも其花は少くとも自然に美麗に咲ております、又勉強するとに致しましても、道德的に而も共同的に考えて之を爲さねばならぬ、故に此考を以て或は耕地整理の如き或は商工業の如きに從事せなければならぬが、人動もすると商工業に於ては、品物を高價に販賣するのを以て、唯一の勉強の如くに思ふてゐるものもあるが、是等は全くの誤解にして決して、勉強といふとは出来ません、眞の勉強の要訣は其信用を得るとにあるので、此信用なるものは所謂名譽の異名であります、其名譽なるものは古來より彼武士なるものが、獻身的に誠實に君國の爲に盡したる最上の美德であります、此美德即ち名譽が社會には信用となりて現はれ居るのであります、故に若し此信用なき時は如何なる良品が自己の店頭にありましても、又如何なる技術が自己にありましても、如何ともすることが出来ません、然り而して此信用を得るは如何せば宜敷やと申すに、开は専ら道徳上の修養をなすを以て必要とするのであ

ります、其次に必要なは實行するといふ事、此實行は吾々事を爲すには最大要件で、即ち、如何なる立派な理想を考えても、如何に學理上の智識を有していても、此實行がなければ何の益にも立ちませぬ、故に私は思ふに此成申の詔書等に就ても、充分なる注意を拂ふて熱心に忠實に實行せなければならぬと信じます、例せば彼の有名なる印度のヒマラヤ山に參りますと

▲夜鶴造巢鳥 と申す鳥が住て居りまして、此鳥は日中は温かいから悠々と諸方を飛揚して居りますが、夜分になりますと冷氣になりまして、寒さを感じて安眠することが出来ません、乃て此鳥が思ふには明日になりましたならば巢を造らうと思ひて、造巢くくく鳴ておりますが、又日中になれば巢を造るのを忘れて、又夜中に至れば又々寒さに犯されて明日は巢を造らうと鳴てをります、如此く夜に入れば寒さに苦み巢を造らうと思ひ、日中になれば之を忘れて仕舞て、畢竟巢を造ることを爲さずに死んでしまふとあります

吾人に於ても實行に疎ければ、此夜鳴鳥と擇女所なき運命に及ぶのであります。故に吾も今日は兎も角も明日より實行するといふが如き考を持たず、總て自己が善と認めたことは今日只今より實行すると云事に決心せねばなりません。又徳川時代に白川樂翁公と申す方がありました、此方は極めて嚴格に勤儉を實行された方でありまして、家内の人達が夜具の襟にビロードを附ました、其處で早速家内の人を呼び之を詰責しました、家内の申しますには之は從來の古物故今回丈はあ恕しを願ひたいと申しますと、相成らぬ只今直ぐに取れと申されました……と云ふことがあります。故に私は此尚風會の發會式に就ても其會の目的とする所について、若々其實行をなすべく奮勵せん事を希望するのであります。(不經校閱、文責在記者)

内務省に提出せる本妙法華宗管長 法谷氏の答伸書「別勸請問題」なる 一項を讀む

金澤 紀野 俊 耀

昨春當地北國新聞は盛に日宗各寺に於ける迷信的勸請物を鼓吹せるに依り、予は世の多くの人士及日蓮門下の僧俗が、宗門に對する誤解と迷信を警醒せんが爲に革新すべき現代の日蓮宗なる一文を公表し、(未詳)之と共に當地日宗教團各録司管事に三度書を送り、本尊の雜亂を停止し共に真正なる活動布教に従事せん事を諫曉せり、(同上)されば本妙法華宗金澤各寺院は之に對し、集合討議の結果、別勸請撤退、連合布教を承認するに一決し、同宗管事貫名志堅氏は部下各寺院を代表し、其誓約的公文を予に送り(同上)之と共に一面に公開演説に於て之を社會に表白されし、然かも其舌根墨跡未だ乾かざるに貫名管事已下は早くも退轉し、畜盜法師等の誘惑と、利養の安全に征服せられ、もろくも迷信軍の前に面縛して降を乞ふに至りぬ、然るに同管事部下の一員たる、釋眞誓氏は管事の變節破約を諫諍し、獨り誓約文を實行して不屈不撓予と共に

に奮闘し、次て華教の宣傳に努められし、然るに同宗管長は何思ひけむ、突如氏をして住職罷免に處しぬ、予は當時公開狀を統一其他に公表して其反省を求め、又自から同宗本山に立正管長を訪ひ、以て管事が誓約破棄の處決と、本尊雜亂許否に就て其意見を問ひしも、氏は遂に凡ての責任を果さず、突如辭職せられし、現管長法谷氏は其後職たり、然かも又予よりせる前後五回の證を厚ふし道を盡したる交渉諒曉に對し、悉く之を沒取し、管事が虚偽の誓約に對する處決と、勸請問題解決との責任を顧みず、不法にも誓約公文を實行せる釋氏に對し、除籍處分を爲すの暴を敢てせり、茲に於てか釋氏は不當處分取消請願書を内務省に提出し、省は之を受理して之を法谷管長に質疑書を發せり、茲に於てか法谷氏は責任なる答伸書を提出するの止むなきに至り、予今之を見るに終始一貫事實を詳り、以て當路者を欺き、専心除籍處分の失態を覆はんとするのみ、然れども之れ一宗の主權者が地位と勢力とを利し、虚偽奸惡を極むるもの、無道は即ち無道也と雖も、予等第三者の關與する處にあらず、然れども法谷管長が急なるの餘り、罪を聖祖に嫁し、あられもなき無茶苦茶なる法義を以て、聖祖より一糸亂れざる相承

也として爲政者を欺くに至ては、聖祖門下に列するもの、殊に此の問題に直接關係ある予の斷じて許す能はざる處也、

さなきだに、雜亂法華の爲に法華經を輕んじ、聖祖を誤解するもの多き時に當て、かゝる公文書の一宗管長の手に依て發表されたるは、實に宗門の爲憐愍に堪へざる處也、答伸書に曰く

別勸請は本宗が獨立の宗派として樹立せる所以の一部に有之候

聖祖上人本化の上首として本佛の教教を奉じ、本門三寶の具体的表現として、十界勸請の妙相表示として、種々深甚なる組織と微妙不可思議なる大教義の下に光顯されたる大本尊を輕賤し、恣まゝに信仰の境的を作つて、統一的なる本經祖判に違背し、散漫無義の信仰を教ゆる別勸請を以て、一宗を樹立する所以の一部也と聲明す、之れ何たる妄言ぞ、若し然らば本妙法教團は聖祖の統一的な大教を破壊せんが爲に、獨立分派せる、城者破城の教團にあらずや、又曰

本宗は日蓮上人正統の法義を一糸も亂れじ繼承し來り現今各寺院に勸請しつゝあるは布教の方便として先師先哲が時機に應じ本尊中より一佛一神

を別座せられ云云

聖祖御制定の統一的本尊を二三にするを以て、一宗樹立の原由と迄聲明する管長が些慥する處なく、日蓮上人正統の法義を一条亂れず繼承すと聲言す、予は其大膽と勇氣とに、三驚九愕せざらんと欲するも得べけんや、されどさすがに法谷氏も少しくうしろめたくやありけん、次下に至りて曰く、先師先哲が時機に應じ、一佛一神を本尊中より別座せられ云云と書して、後入潛妄の所爲なる事を表白す、何ぞ聖祖正統一条不紊の宣言と撞着するの甚しきや、借問す聖祖は時機に應じ、大本尊を分解して一佛一神を別立せしむる大權を、像門流に特許されしや、予祖判を拜するに、「之れ日蓮が自作にあらず、多寶塔中大牟尼世尊分身の諸佛すり形本たる本尊也」と仰せらる、本妙教團は時機に應じて本尊の集散離合、若破若立、不思議の妙用を有す、之も一条紊れざる像門正統の秘傳口傳なりや、聖祖の能はざる處尙之を能くす、げに本妙宗は「正統」曰上なる哉、又曰

本宗は、本宗の慣習に依り、信仰の紊れざる範圍に於て之を安置せしめ居り候

茲に至りて、予は氏が意の存する處を知るを得たり、即

し、しかのみならず、釋氏が誓約實行をなしたるを以て、本宗の末寺を苦しめしとは何等の妄言、釋氏自厲たる慈雲寺は、本隆寺の末寺にあらざるにや、氏が云ふが如くんば、釋氏自から自房を苦しむる義にあらずや、宗義を没却し、宗門を忘れたる無道心僧の所論多く如斯、曾て誓約責任者中、圓融寺住職が破約して金澤を去らんとし、管長に提出せる辭職書(同上)と相待て函蓋相應、上下一致、羣體同心の態度、たゞ呆さるゝの外なし、阿々

あ、先には別勸請は、自宗分派の原因と稱しながら、前には釋氏が如何に、圓融寺に於ける帝釋天徽法を實行するやを試ん爲に、該寺住職に任せしとは何等の矛盾なるや、若し然らば所謂一宗分派の原因を破壊する本尊統一實行を管長自ら容認したるものにあらずや、自立癡妄も又甚敷哉、更に又驚くべきは同書中、

別勸請問題の如き冷靜に宗義上より常に慎重に研究を怠らず罷在候

の一段也、先には「別勸請ハ本宗ガ獨立ノ宗派トシテ樹立スル所以ノ一部也」と論決し、今は研究中也と云ふ、然らば本妙法華宗管長は自宗獨立の原因をも、只今冷靜に研究中と見ゆ、本妙宗制に記さずや、管長は

ち氏の正統の法義とは、茲に所謂「慣習」の邪統にして一系紊れず、とは別勸請の妄行を傳々相續して改めざるの謂ひなる事を、

然も信仰の紊れざる範圍に於て之を安置せしむとは何たる弱音を吐き給ふや、聖祖語あり、辛さを藥業に習ひ、臭きを酒圃に忘ると、あゝ憐むべし、信仰紊亂の極に達して尙之を自覺せず、道念全く地に墮ちて尙日蓮正統と誇稱す、恰も重症なる肺病患者の氣息奄々死に頻しつゝ、尙已の病を自覺せざるに似たらざるや、一度ひ信仰を紊すべく本尊の雜亂を許して、後再び改めて信條の亂るゝ時あらずや、氏の所謂紊れざる範圍とは、紊れて後の程度範圍を指すなるべし、根本的制限の謂ひにはあらず、又曰

眞誓は神派の僧侶に煽動され別勸請問題を伴ひ唯一本尊主義を實行せんと淺薄なる議論を以て、本宗の末寺を苦しめんとし(中略)然れども本宗に於て眞誓が實際に於て彼が主張を如何に實行するやを試みんが爲に……圓融寺住職に任じ云々

云ふ處の他派の僧侶とは、云ふ迄もなく予を指す也、然かも予の爲法的諫曉を以て、煽動とは何等の無禮ぞや、此の一語氏が無道心を標榜して餘りありと云ふへ一宗僧侶の安心の正否を裁定す」と、かゝる大權ある管長が、今時信仰に入る最初の要件たる本尊に對し、之を雜亂するの可否に就て御研究中とは予等唯其熱心なる態度に敬服の外はあらざる也、あゝ法谷管長の特有たる、日蓮正統一条紊れざる當にならぬ事甚し、宜なる哉勇將の下に弱卒なると、同宗眞名管事の宗義上の變節破約を意とせざる、同宗宗會の滿場一致を以て本尊統一論者の除籍處分を爲す事や、法谷管長が予よりせる數回の道を盡したる質疑に答へざる、知らざりき、皆之れ管長が法華宗の本尊に迷ひ、盛に否冷靜に御研究中の故ならんとは、

予宗史とひとくとくに、曾て慶長年中身延池上真開中山及京都の日宗諸本山一圓に、時の政權者を恐れて念佛無間等は、經釋無之と答へき、先頃日經上人、獨り身命を賭して、明かに經釋に存する旨を答へて憚らざりき、彼の時は徳川政府の迫害を豫期して消極的に宗門を護持せんとの意、恕すべき點なきにあらざるも、現代に於て法谷管長が内務省に提出する公文書中、前記の如き妄を敢てし、明治日宗史上に拭ふべからざる一大汚點を印したるは、かへすくも遺憾の極みなりとす、予先に謙迷類末錄を刊行し、特に本妙法華在野の健

兒が起て革命すべき時なるを告げしも、遂に一人の能く管長を諫曉するものすらあらず、遂に事致に至るべく憐むべきは同宗が精神的滅亡の現狀にあらずや、覺醒せよ、傑門正統の迷夢を、奮起せよ同宗一百の健兒!!

村上如水君に答ふ

井村 日 威

曩に研學の態度に就てと題して掲載したるに對し大阪府下村上如水君より質問せられたるに依り左に質問を掲げて之に答ふることとなしぬ

(質問) (一)宗派に囚はる勿れ

と云ふ御説に依らば一宗一派と云ふ觀念を去りて統一の釋尊自から御定めになつた宗旨に依りて後代の論師人師の立てられた偏狹なる宗派に依りてはならぬと云ふにあり然かるに此れ等の説は各宗各派何れも同一の考がへにて皆各々我が宗旨こそ間違ひのなき釋尊自から御定めになつた宗旨と思ふが故に彼の富士門派の如き唯授一人の秘法と稱して誇り八品門徒には三千帖の大法門と誇るも各々其標準とする所

て解釋すると矢張色が映つて赤い、青いと争ふから色眼鏡を掛けないで研究せねばならぬと云ふのであります、何れもが眼鏡なしで研究すれば日宗各派は勿論、進んでは佛教の統一せらるゝことは疑なきことであらうと思ふ、

(質問) (二)宗學と普通學との關係

に就て御説に依らば現代の僧侶は佛教の眞理を社會へ弘布するには世間の普通學も修めねばならぬと然かり去りながら今日の僧侶にしては未だ普通學まで修する暇さ之れなき感あり我が本職たる佛教の研究すら行なはれざるに普通學を研究するときは佛教家として世間の地球説自からも信じて人にも喋々して肝心たる自立の須彌山説は一向知らぬと云ふ状態になりはしまいか

(答)御質問の通り佛教は深き眞理を説きたるもの故素より充分の研究を爲す事は容易ならぬ事であり、然し之を以つて世人を救済するには對手の考を知らずして、先方に分らねば役に立たぬのであります、佛教に機を鑑みよと云ふことを説かれたのは此の爲であり、世人の考を知ることが普通學を一通り心得ると云ふことは必要ではありませんか、

は何れも皆經說祖判に依らざるべからず又依るに相違無し若し經說祖判に依らざる宗派ならば外道の法として論ずるに足らず然らば經卷相承の宗派と云ふ事は我が顯本法華宗のみに限らず各派何れも本經本論を以て根據とすと相考ふ

(答)御説の通り何れの宗派でも皆自分では佛祖の本意を傳へて居る積りて居るのであります、が其れが果して本懐を得て居るか否かは一定の標準の下に判別せねば分らぬのであります、其標準となるのは本經本論であります、其本經本論を解釋するに先師先輩の意見の爲めに誤りたる解釋を加ふことが往々あります、先師先輩の意見若くは口傳秘傳と云ふ様なことが先入主となりて公平に解釋せられずして、牽強附會の説を立てることかあつて、それが全然本經本論の意義と反對する場合も出来て來ることがあります、それ等は皆宗派觀念に束縛せらるゝ、即宗派に囚はるゝから起る迷見であります、故に佛教の其意を得んと思ふには直に本經本論の意義を會得する様、本經本論を有の儘に解する様努めねばならぬのであります、之れが先に宗派に囚はるゝ勿れと云ふ次第なので、各宗が經論を本據とせぬと云ふ意味ではないのであります、色眼鏡を掛け

(質問)又千古不變の佛教の大眞理を社會へ説明するには時代に適當したる普通學研究の素養なかるべからずと如何にも彼れが地球説と此れが須彌山説と比較勝劣を論ずるときは普通學素養も必要なれども只普通學の知識なくんば現代の人に佛教の大眞理を説明し之を了解せしめ得る能力無しとすれば圓滿なる佛教の價值更らに無きものゝ如し釋尊の須彌山説の天變地天の説其儘今日の人々には不適當にして却つて今日の科學上より排斥せられて其答辨に苦しむ杯の事あるとするときは夫れ以上に何なる大眞理あるとも到底信成しがたし吾人等の勘へには釋尊の須彌山説も遠祖の天變地天説も其儘立派に説明して今日社會の思想を驚かし外道の地球説の如きは全然排斥して我が日本を宜しく佛教國たらしめんことにつとむるを切望して止まざるなり

(答)御質問の趣意は拙者の所論を熟讀せらるゝならば御了解の事と思ひます、佛の説き給ふた全部が佛の第一義即ち終極の目的を説いたものではないので、或點迄は世間の情意に順ふて説かれたのであるから、其迄も佛説として維持する必要がない、須彌山説の如き印度在來の外道の説に過ぎない、それを今日に於ても維持

せねばならぬ必要はありません、それが破れたからとて、佛教が破れたのではありません、三千年昔の印度の人の考が破れたのである、そう云ふ事は世間の考に任せて何れにても差支ない、之を随方毘尼の戒とも云ふて、其理に差支なき限りは世間の考に随ふて宜敷と云ふことになつて居るのであります、我等は日本計りて無く世界を佛教國と爲すことに努めて居るのであります、科學上の事柄までも、三千年の昔の印度の思想にせねばならぬと云ふ必要は認めて居りません

(質問)次に又質問致し度は本宗は顯本法華宗と云ふ宗號なるに此程或る他派の信者に出會ました所が君等の派は一品二半正意じやと從淺至深の法義なる故に宗祖の御本懐に叶はずと申しまして何とも返答しませんでした、我が次第の雜誌に了解成しやすく御説明の程願ひます

大阪府下村上如水拜

(答)本宗を一品二半宗と云ふのは他派の人が、自分の八品杯と云ふのに對して、獨り極めに付けた名であつて、我宗では知らぬこととあります、我宗は三大秘法事であり、日蓮大聖人が三大秘法を以て宗旨と定められたることは祖判到る處に明白なることであつて争はれぬ事柄であります、三大秘法の法門が何れより

の躬行實踐談と通俗卑近の言語もて約二時間長の演説を爲し、次に有吉知事は尙風會の目的は戊申詔書の御總旨に一致す、戊申詔書は尙風會の信仰箇條なりと論じ、次に千葉彌次馬氏の樂觀的衛生樂觀的農業と題し、携へ來れる大麥小麥の大苗を聽講に示して、煙炭肥料の効果を説き、次に山本大佐は自治体の基礎と題し、滿州に於ける見聞の事實を語り、午後五時三十分閉會各講師の演説は何れも眞摯熱烈にして十餘人の會衆は森として傾聽し、只講師の登壇毎に屋を撼かすの大拍手を見るのみ閉會後有志の宴會あり、席上本行寺住城中村師の挨拶、來賓總代山本大佐の挨拶ありて、隨時散會せり

源支部發會式

本縣尙風會源支部發會式は豫記の如く去る四日午後二時より山武郡源村布田藥王寺にて舉行したり、摸範村長山本八三郎氏は開會の辭に併せ日本開國四十年間物質的文明の進歩に對し精神的文明の伴はざるを叙し、尙風會の興起せる必要を簡明に語り、次に君が代の奏樂猪野重之助氏の戊申詔書捧讀、井口義十郎氏の教育勸諭捧讀あり、石川正徳氏の内務官吏出張理由、内務派出官前田宇治郎氏の自治と教育、鶴澤博士の地方自治の精神、有吉知事代理法學士香坂昌康氏の尙風會に對する希望の題下に順次演説し、午後五時閉會せしが前田氏の演説は地方の實例として趣味饒く鶴澤博士の釋、孔、孟、プラト、二宮尊徳等を説き、二宮は管仲の説を宗とせ

報 道

尙風會記事

濱野支部發會式

簡人品性の向上と社會風紀の改善とを目的とする千葉縣尙風會は豫記の如く去月廿八日千葉郡生濱濱野村本行寺に於て其支部發會式を擧げたり、午後一時半尙風會本部幹事岩佐春治氏開會の趣旨を演べ、君が代の奏樂高梨恕平氏の教育勸諭捧讀、飯豊利一氏の戊申詔書捧讀ありて、内務省派出官前田宇治郎氏、町村魂の發揮といふ題下に同派出官法學士長岡隆一郎氏は農村の改善といふ題下に内務省にて取調べたる實例を引きて演説し、次に加納子爵は尙風會に於て所感を述べ、題し自家

しもの也尙風會の諸君は二宮を尊崇するは可なれども更に高處に着眼せざる可らずとて哲學、宗教、法律を打して一丸とし、縦横快辯を揮ふこと一時間半、千餘の聽衆を醉殺して、滿場の喝采を博し、因に同會本部より岩佐春治氏出張し、支部にては既記の外中田日蓮師等萬事に斡旋されたり

廣島通信

(鈴木孝碩報)

○本宗西部講習會 三月廿七日より本照寺に於て第三回講習會を開催せられたり、講師本多親下の一行は廿六日午後五時御着此の日寒氣凜烈、特に御着の時は佐渡原三味堂の雪の其れの如き大飛雪にて昔を想起せしが、信者中には唱題する者もあり、出迎人大橋師を始め十五才の少女より老たるは七十五才位の男女七十名餘は雪を頭に受けつゝ、親下の一行を歓迎せり、導師を思ふの熱心なる信徒には不肖感服の外なかりき、講師及一同は先づ佛前に進みて願經をなし、終て散會す、翌廿七日午前八時を報するや、講師及聽講者は本堂に於て讀經せられ、事務主任大橋師開會の辭を述べ、續て能仁事紹介に依て野口講師登壇、佛教の各方面にて科題の下に講演次には本多講師は「佛教の神髓」にて科題の下に懇切に講演あり、國友講師は九州布教の都合ありて廿九日若同師は「聖日蓮の國家觀」にて科題の下に講演、野老科外講師は日蓮上人倫理觀能仁科外講師は戊申詔書の信

解てふ科題にて講演あり毎日午前八時より午後三時に至る各講師の講演にて聴講者は關西布教師及遠きは岡山姫路四方の信者并に當市の有力なる人にて毎日八九十人の聴講者にて頗る盛會なり中には本門宗僧俗新聞記者等も參聽ありたり亦た本多野口兩講師は尤も懇切に尤も周到に講演せられたれば尚閉會の際にも講習生一同は萬腔の喜を以て佛陀の慈悲に報謝の讀經を修し大橋事務主任は聴講者を代表して講師閣下に感謝の辭を述べ芽出度散會したり 管長親下より聴講證を拜受したる人名左の如し

拾五教區野老乾爲能仁事一原田容廣拾六教區大橋日觀拾九教區成島隆康拾二教區高橋遵頌拾四教區鈴木孝碩の各布教師并に島田顯恕山本通辨田久保日城溝口會旭堤正音安田台城吉田義章森義觀天崎會温明石會詔須山茂三郎百々正利鹿野忠勝堤孝之助入江善平氏等なり

因に廣島寺院并に檀家總代等は講習會に熱心に奔走せられたり

○説教并に演説會 廿七日より一日に至る毎夜午後七時を以て交代にて管長親下野口僧正野老權僧正能仁權僧正成島僧都原田高橋權僧都田久保安田二教師の説教あり午後三時より演説會にて聴衆五百人餘にして未曾有盛會なり今演題并に辯士を擧ぐれば

廿七日開會の辭島田顯恕師——信仰の標準能仁事一師——美しき生活野口僧正、廿八日人生第一の寶原田容廣師——日蓮上人の愛國野老乾爲師、廿九日信仰の要

て境内には數軒の店出しありて未曾有の盛會なりき因に當日參詣者一般には折詰の饗應あり法要後紀念撮影して出席僧員には特に分與せられき、大橋山主島田溝口信徒總代等飲食をも忘れて奔走ありたるは誠に奇特の事に候同日午後四時より大橋師の前席に次て管長親下の御親教あり六時芽出度散會せられたり

○大林區署講演 署長某氏は他宗の信者なりしも本多上人一行の來廣を幸に部下の官吏に精神修養の爲め法華經主義の講演會を開き講師として本多上人野口僧正國友文學士を招請して三日間熱心に聴聽せられ始めて法華經の廣大日蓮上人の偉大なる人格者向上人は國家を思ふ情の深き事を知り大に精神修養の助けとなりたる由にて早速署長自ら本照寺へ參り謝辭を述べられたり佛敎の爲め否某氏の爲めに賀すべき事に候今回の活動法益はより以上の事なれ共餘り記事か長文になり候間不肖記憶の一端を御報導申上候

○鎮西の曙光

文學士 國友 日斌

記者足下、一度九州を去て廣島の講習會に列し候ものゝ、機縁純熟せる半西州の蒼生を唯一回の巡教だけに乞ふて、四月九十の兩日、九州の都福岡市に於ける大演説會となり申候

義成島隆康師——法華信仰の順應力能仁事、三十日正信とは何ぞや鈴木孝碩師——月愛の光管長親下、三十一日日蓮上人の忠孝愛國の生涯國友日斌師——月愛の光其二管長親下

○四月一日 午後一時より公會堂に於て大演説會開催せられたり大橋日觀師開會の辭、國友日斌師の舊套を脱せよ、能仁事一師の本佛の元に拜跪せよ、野老乾爲師道徳の根源、野口僧正興國の宗教、管長親下日蓮上人に對する誤解等に就て熱心に演説せられたれば、さしにも廣き公會堂も立錫の餘地なき程の來聴者にて一千人以上なりき此の日の聴衆は紳士學生官吏市民の有力者新聞記者教育家九分を占め未曾有の盛會特に本多親下の演説は教益多大なりき、三日藝備新聞に各辯士の演説殆ど半首程掲載しありたるは眞に喜ぶべき事に候

○庫裡落成式法要 本照寺は現置大橋師は師範日正上人の跡を次ぎ一意専心に信仰の革新と寺院經營に全力を以て活動せられたれば信徒の歸依も深く昨年改造の工事を起し約五千圓を費し本年三月芽出度落成を見るに至りたれば四月二日午後二時其の法要を執行せらる天童二十餘名は一町先きより本堂へ練り込み管長本多親下大導師、野口僧正、大橋山主は副導師として講習會出席僧員を招請して嚴肅なる音樂大法要を修し野口本山部長の祝詞文次て天童の献花あり島田溝口二師を始め總代諸氏は幹旋盡力し參詣者八百人以上に候

會場は雄鷹座、福岡を初めとして遠く熊本崎久留米等の新聞にも、この未曾有の壯舉を喧傳され、又識と未識を問はず、福岡の有志は準備に東奔西奔し、いよりの當日となりては、聴衆遠きは二十里三十里、近きも十幾里を草鞋掛けにて雲集致し申候、演題は

- 佛敎の卓越せる所以 野口 僧正
- 九州人士に望む 野口 僧正
- 日蓮上人の卓越せる所以 野口 僧正
- 道義の大本 野口 僧正
- 日本の天職と宗教問題 國友

効果無量、饒益多大なりしは申上げずとも御想像の事と信ず、初日の演説にて既に同地に日蓮研究會設立の有志者を得、第二日の演説にて直ちに其の事決定候て、會員無慮三百名を得べき成算相立ち申候、又自分は會の講師として何地にありても牛耳を握るべき筈に候更に熊本市の有志に懇請され候が、福岡に於ける布敎の結果は、單に巡教よりも、むしろ本營を移して、永住の覺悟にて、大に經營すべき有望なる事業を幾多發見候文々、一先づ東上候て身の仕末をつくる事に發心致候

記者足下、自分は近頃常遊化院と號し居り候が、宗風を振揚すべき好機の來り、又蒼生を濟度すべき機縁の純熟せるを見ては、しばしにても自坊に晝寝を貪る能はず、閑居にも餘りに道念の強するを覺ゆる申候かくて記者足下、半月の餘融に鈴木孝碩師と同行、兩

丹及近畿の巡教を初め申候、一は以て昨秋大舉布教の効果を全うせんがため、他は以て新に吾人が活動の地を開拓せんがために候、昨日にて兩丹地方を終り候、於世木、舞鶴、宮津には修委會又は日蓮研究会の設立を見、又上杉村には新に一致派教會所々屬の信徒を全部侵略候て、教會所設立の壯舉に一步を進め申候、又龜岡町にても有志者數名を動し得て、今後毎月出張布教の決定を見、國分村にては二名の信徒と數名の求道者を得、加ふるに村長を初めとして村の有力者は大部分は心を傾くるに至り候まゝ、今後餘程の發展を見るべしと思はれ候

明日出發内巡教の途に上るべく、結果は次便に可申上候 敬具

京都通信

○總本山妙滿寺大法會 例年の如く京都總本山妙滿寺にては去る四月十一日より三日間大法會を修せり今其概要を報道せん

十一日 是日 管長本多大僧正親下及本山部長野口義禪は三月中旬より廣島講習會に出席せられ引續き山口縣福岡縣地方御巡教の爲め登山一日後れたるを以て宗務總監山根日東師代りて大導師たり、午前大法會午後日露職役職死者追吊、及び伊國震災法要を修す午後三時より高橋道碩、山根日東兩師の説教あり同夜七時より講堂に大演説會を催す

一、信行の軌道
一、信仰の完成
一、日蓮聖人の卓越せる所以

安田台城師
成島隆康師
本多日 生親下

にして參聽者三百名餘熱心に拜聴したり殊に 管長親下の御親教は二時間に亘り中間五分間の休憩にも一人として去るものなく、午後十一時別れを信みて散會せり、それより大廣間に於て登山僧一統の爲めに慰勞の酒宴を開く、席上東京天晴會幹事辯護士松本太郎氏は計らずも本山大會に參詣せられ信仰の表白將來の希望に就ての演説あり一同歡を盡して萬歳三唱のもとに穿出度散會したり

因に妙滿寺婦人會は醒悟箋五千枚を印刷して信仰革正の爲めに配布し、山内近末寺院及信徒總代諸氏幹旋甚だ勤められたり、尙登山僧には

今成乾隨、山根日東、成島隆康、里見日潮、齊藤海叔、島田顯怒、岡本圓正、内藤日郎、梶木日種、國友日斌、高橋道碩、高田日暢、木村日順、夏目智誓、飯塚志善、三上義徹、安田台城、田邊慎一、松本眞釋、高木本順、御園榮頂、三妙信道、寺田泰正、川崎本照師等なり

○教學財團評議員會 翌十四日は本宗教學財團評議員會を開かれたり

管長親下には翌十五日午前六時七條驛出發、大阪、岡山地方に向け御巡教せられ野口部長、國友文學士等隨行せられたり

一、人生の感懐
一、在に實を添へよ
一、救済の力

三上 義 徹 師
内藤 日 郎 師
齊藤 海 叔 師

にして來會者百名に越へたり

管長親下には同夜十二時半野口部長と共に無事入浴せられたり

十二日 午前大法會には管長親下露路疲勞の御身を厭はず大導師として御出席せられ、午後は野口本山部長導師として教學財團翼賛員先祖代々の爲めに嚴肅なる法要を修し本山總代及町内寄附者の焼香あり、説教には夏目智誓師前席を勤められ終つて管長親下の御親教ありて法悦歡喜の涙にくるゝもの多かりき、同夜の演説は本山大覺青年會の主催にして警告箋一萬枚を市中に配布して青年男女の信仰鼓吹に盡せり

一、法華經の二大教義
一、所作佛事
一、佛教の卓越せる所以

梶木日種師
今成乾隨師
本多日 生親下

來聽者二百餘名熱心に拜聴せり

十三日 管長親下には中外日報社主催の佛教大講習會に講師として善量品を講ぜらるゝ事となりたれば午前の法要には野口部長導師として修し、午後一時より管長親下御親臨、本山功勞者追善法要、及村上貞藏氏功勞感謝の法要を修し、引續き大法會資室施主の施餼鬼法要を營み、説教には野口部長之を修せられたり、同夜の演説會は

松本眞釋師

○宗教的結婚式 京都成就院信徒大橋總右衛門氏令嬢照子氏は今回松田環氏を婿養子として迎へらるゝにつき、川崎英照師は媒酌人として兩者の間に斡旋し、四月廿六日照子嬢の宅に於て三寶諸尊の御前に野口僧正導師として出席せられ、尤も意義ある宗教的結婚式を挙げられたり今其式の概要を報せば

受持、勸請、讀經(御妙別拜讀(大橋、照)に續て、新郎新婦は立つて誓詞文を奉讀し、野口僧正の奉白文、宣示ありて後式杯を擧げ、それより父母親族の式杯終りて披露の酒宴を催せり

由來宗教家が法事葬式を専務とせる時代は既に過ぎて近來、人生に宗教の必要を認め、宗教者の天職を覺るに至りしは誠に喜ぶべき事にして、兎角に因循姑息の評ある京都に於て、尤も眞正にして尤も進歩せる此現象を見しは大に誇りとすへく亦模範とすへき事ならずや(臥雲生報)

○大阪教信 大阪市西高津中寺町蓮成寺にては、舊來千部會と稱し例年一回大法會執行の規定なりしが、近年中絶せるを以て現任職木日種師は、檀家總代と協定の上今回復興することとし、檀信徒一同奮起して本年は特に總本山より管長本多大僧正親下の御親臨を請ひ併せて御親教を仰ぐこととなり、即ち四月十五日午前十時より管長親下の大導師にて、一行の野口本山部長、國友文學士を始め寺主梶木日種、組寺堂閣寺主古谷養真、福井縣木村日順等の諸師參列、右大法要を營

修せられ、午後一時よりは管長親下の御親教あり二時間に亘りて懇切に御垂訓、満堂の聴衆非常に感激し法悦歎喜に満たされたり、思ふに大阪の教勢は此れより發展の氣運に向ふべし、因に祝下の一行は即日岡山へ向け出發せられたり

○岡山教信 當市山崎町本行寺は、權僧正能仁事一師任職以來岡山附近に於ける本宗の教勢益々發展を加ふると共に、在來の坊舎狹隘を告げ且つは其建造年久しき旁々改築の必要を認め、權僧徒一同奮起して大改築の計畫を立て、去る明治四十年八月を以て起工し、先づ其表門と塙塙とを改築し、次で在來の坊舎は悉皆崩解し且つ地域を擴大して更に堅牢なる大地均らし工事に着手し、其處に六十疊の大書院を始め書院、管長室、茶室、客室、居間、玄關、應接室、祈化室、墓所、下男部屋、浴室、倉庫等を新築し、庭園二ヶ所を飾り、孰れも美術と衛生とに好適せる配置を取り、茲に宏壯典雅の坊舎は本年四月中旬を以て全く其工を竣へたり、右工費は今日迄一萬三千餘圓を要し、工事の監督は左の檀家總代諸氏担当盡力し主幹小野氏は始終從事せられたり

主幹 小野善吉 須山茂三郎 久城茂太郎 横山善吉 渡邊榮吉
宇垣三郎 内藤武八

かくて斯の大土木は前後三年に亘り魔事なく成滿せるを以て、茲に其成滿の式典を舉行することとなり、即ち四月十六、十七兩日を卜して管長本多大僧正親下を

佛祖加護の致す所、眞に佛恩の深高なる報謝の至に堪へざるなり、經に云、皆是佛之威力唯願世尊在於他方遙見守護

惟ふに今後此御靈に依り開進顯本大法の宣傳歳と共に昌へ、外には邪宗權門の情輩を折伏し、内には純信の徒族を化育し、本化の道統日に發揚し、以て四恩に報答し奉らん事を、謹んで誓願し奉る、誠恐誠惶頓首敬白

慶讚文

南無本門三寶尊、哀愍納受
維時明治四十二年春四月春風颯颯庭櫻咲ヒ楓葉紅ヲ凝スノ時、本行精舎改築方ニ成リ本日ヲ以テ落成ノ式ヲ舉行ス
夫レ寺院ハ常轉法輪ノ道場ニシテ衆生得脱ノ寶所ナリ、近來岡山縣布教ノ發展ハ非常ノモノニシテ道場其ノ狹隘ヲ告グ茲ニ改築工事ヲ企畫スル所以ナリ、工事日ナラズシテ功竣、其高莊ノ美布教ニ適シ善盡シ美ニ叶フ、先師兒玉日容師、本多日生師ノ布教ニ根底ヲ爲シ、又現日統師ノ布教其宜シキヲ得タルニ俟ルモノナリ、除暗世間ノ光明ニシテ廣宜流布ノ先軫ナリ、今此盛時ニ會シ聊カ經文ヲ以テ之ヲ慶讚セシ

種々寶物而莊校之、五千欄楯齋室千萬、無數幡幢以爲嚴飾、垂寶瓔珞寶鈴萬億而懸其上、三十三天雨曼陀羅華供養寶塔

屈請し、本山部長野口僧正を始め、十五教區内各寺住職には和氣本成寺原田權僧都、津山本蓮寺山名木信、土居本典寺牧田英長、播州妙信寺山本通辨、姫路妙善寺野口會英の諸師、大阪よりは蓮成寺梶木權僧都、廣島よりは妙詠寺島田僧都、孰れも隨喜參席あり、さて初日十六日午前十時より本堂に於て成滿式大法要を嚴修す、大導師本多管長親下、副導師本行寺主能仁權僧正並に野口僧正、其他前記參列諸師及び松崎事成、等の諸師と役僧數名は、宗歌奏樂の間に着座、三寶禮、受持、勤誦、讀經、行道、寺主願文、祝辭、謝辭、唱歌、燒香、回向、受持、三歸、奏樂の間に退席、夫より大書院に於て能仁山主の式辭あり、次で管長親下の御親教あり、終て參會者一同に酒飲の餐饌あり一同款を盡して夕刻前日出度散會せり、此日は純信者一同並に山陽中國兩新聞記者招待、會衆五百余名、左に能仁山主の願文、野口僧正の慶讚文を掲げん

願文

爰に本日一會の大衆と共に身心る清め恭しく
彌浮統一壽重の大本尊の御前に拜跪合掌して、當山第二十八世嗣法不肖日統謹んで告白し奉る

凡そ佛法の興隆は法華講演の常轉を以て本とす、然らば從て轉法輪の處なかるべからず、依て寺權同心協力客殿庫理の改築を企て以て弘法の道場に充んとし土木を運ぶ事茲に三年、此間魔事なく漸く功成り本日と以て成滿の式典を舉ぐるに滿る、是れ全く

又曰 我此土安穩 天人常充滿 園林諸堂閣 種種寶莊嚴 寶樹多華果 重門高樓閣 男女皆充滿 佛陀三寶、此處ニ來臨影向シテ、化道三世ニ高ク光明十方ニ遍カラシ
仰願 天皇陛下寶祚萬歲、國運隆昌萬民快樂、妙法廣布邪法廢滅、乃至法界平等利益
南無妙法蓮華經

明治四十二年四月十六日 事智悲院日主 和南

右の外祝辭、祝文等を朗讀せる氏名左の如し
白石信徒總代 平松竹六 津山信徒總代 玉置圓次郎 吉ヶ原全 中村孝利 和氣全 長谷川久造 和氣同信會總代 周藤俊徳 白石信徒總代 坂野順平 從六位勳七等檢事 保江 衷 十六教區僧員總代 島田顯恕 大坂蓮成寺 梶木日種 和氣本成寺 原田容廣 大僧正 小林日至 (謝辭)本行寺總代須山茂三郎
又左の諸氏は祝電を寄せらる

伯耆本立寺 窪田 鶴榮 三州豊橋にて 高田 日鶴
泉州堺 保江 夢 大坂 奥山清太郎
大坂にて 影山 謙二 津山 上田竹次郎
京都 村上 貞藏 作州 高木 本順
兵庫 上田 智量
此日午後八時より新築大書院に於て大演說會を公開す
その演題等次の如し
開會の辭 能仁山主

國師論

野口部長

佛教の卓越せる所以 第二日即ち四月十七日は婦人會員一同參詣、當日正午より成講式を嚴修す、式典次第、參列僧員等前日に全じ、左に婦人會總代の祝辭を掲げん

祝辭

遠山櫻ゆきとみて春の心を知る人も、梢の紅葉花と見て秋の心を知る人も、春の山風さそひなば、秋の山風さそひなば、谷の小川の風情のみ、里の小川の風情のみ、其川水の花紅葉は只一時の風情なり、又止るべき様もなし、あわれ我等の心の華は散りもせて、流れもやせて、常に嬉びに満たされつ、此の心の心悲しきにつけ、うれしきにつけ、現はれてはそこには妙法の五字となる、唱へまつるにつけても今日のうれしさやみがたくて

法重ければ弘まると、宗聖のみ聲こゝにあらはれてはたわが師能仁上人の御教化のよろしきによりて、こゝに庫裡落成となる

あはれこの嬉び何にたとへん、只南無妙法蓮華經とあまりのうれしさに、拙き筆をまかへりみず、祝きまつるになん

明治四十二年四月十七日

顯本法華宗岡山婦人會總代 栗原久滿 合掌
右法要後大書院に於て前日同様能仁山主の式辭と管長親下の御親教あり、終て一同祝宴を張り時散會す、

會衆三百余名、同夜又公開大演說會を催す、演題は次の如し
法華經の二大教義
快樂は信仰に依て得らるべし
日蓮上人の主義人格を論じて現代の飲陥に及ぶ
梶木權 僧都
野口 僧正
管長 親下
兩夜の演說會に於ける管長親下の御演說は特に大獅子吼にて化益廣大、さしに廣き六十疊の大書院も立錫の餘地なく縁側より應接開闢まで充滿し、改築々已に業に狹隘を感ずるの盛況を呈せしは祝すべき現象なり
右十七日夜演說閉會後、僧俗重立一同懇勞の宴會ありて殆ば徹宵歡談湧くが如く、かくて一同及び有志者は十八日午前五時十八分發車にて歸東せらる、管長親下の一行を驛に奉送し、茲に斯の成滿大式典は目出度終結しぬ、今式典委員の氏名を擧ぐれば
御寶前掛 中川 事顯外二名
會計掛 小野 善吉外二名
受付掛 大鯨虎太郎外一名
僧侶接待掛 川手 利七外二名
來賓接待掛 久城茂太郎外四名
信徒接待掛 渡邊榮太郎外十八名
演說掛 松崎 事成外十二名
庶務掛 横山 藤吉外十名
以上は我が岡山本涌山本行寺坊舎改築成滿式の概要なり

り、今斯の盛事を祝すると共に今後彌益す 佛陀の靈光を發揚せんことを庶希ふ(鳥城生報)
○東京顯本協會の組織 今回東京顯本法華宗寺院の奮起し、要書出版に巡回演說に文書傳道に教義宣揚のめに活現したるものを東京顯本協會とす、四月二十九日八日淺草永住町妙經寺に於て發會式を擧げ、午後一時より演說會を開く

開會の主旨

實在の意義

信仰の力

日蓮上人と其時代

靈量品の一節

演者各自の特長と識見を吐露して、聽衆多大の法益を享けたりと悦べり

○盛岡の春光 三月中旬以降教化に殆ど寧日なく諸方に福音を傳へ給ふ本多管長親下は、今また盛岡檀信諸氏の懇請を容れ、四月二十三日笹川信都を隨へられ午後一時來盛あらせられたり、同廿四日は法華寺前住伊保内日海上人の本葬式に大導師を勤修遊ばされ、廿五六の兩日御親教あり、東都は已に晩春初夏、人は花に訣れたるも、盛岡は梅に桃に櫻に百花輝爛を争ふ春色韶蕩の好時期なり、然るに管長親下の來盛は九ヶ年振りにして、目前生ける聖者に接觸し、生ける教訓を心田に種ゆる盛岡檀信の人の法悦如何ばかりなりしを世間の春光なんのその、法華開顯の春光に今年は浴したりとて、檀信の一人は打ち續く麗かなる日を指して

管長天氣といふ、以てその喜びの一端を窺ふに足る
○備前和氣通信 備前和氣本成寺近郷には例の不受不施宗の頑迷者流ありて元來法華經の眞髓聖日蓮が宗意を知らず只習慣上肉食妻帯の不可なるを眞正の教義かの如く誤信し本宗の徒と折切口論を爲す事ありし然るに原田師は愈今般彼れ不受不施の迷徒を覺醒さすべく去る二日午後七時半より本成寺に於て肉食妻帯公論附不受不施宗内の旨者を駁すて題下にて約三時間に亘る大折伏演說をなし大に立宗の精神を發揮せられたり其已前彼の徒の集合部落益原の高代某へ代表者として多數誘引來聽質問討論隨意とし若し差支の故來聽せずんば當方より出張すべく由の宗内狀を發せしにも來聽する様子なければ本宗青年信徒は自轉車にて再三來聽を促したるも只承諾せるのみにて更に來らず去れど堂外に十數名蹙然參聽し居たりし原田師は今後肉食妻帯公論なるものを印刷し言論筆紙相待て彼の迷徒を説諭すべく又本宗信徒は何か爲す處あらんとする由
○顯本法華第六定期會 五月一日より拾日間淺草新谷町慶印寺に於て開かれたるが、同宗は教學の發展宗風振起に舉宗一致焦心し、着々その功果を收めつつ他面に向て光彩を放つは夙に世の認むる所なるが、今次の宗會に於ても、任職確認の保障には、功勞章を有する者たる事其一、財團完成を期するためと教學發展の實効を奏する爲に、宗費以外に特別賦課金徴収の方法を規定せられたる其二、布教獎勵の爲に布教師活動

の遺憾なきを畫策したる其三、學制上に於ては教師の實力を培養すると同時に、變則教育を受けたる者は正教師に昇進する事を得ず、凡て中等教育を初歩として進み事其四、如上の決議は宗風振起の理想を現實ならしめたるものにして、眞に慶賀すべきことなり、尙功勞章授與の詮衡に當たり宗會議員中選ばれたる詮衡委員宗議員評議員等は、何れも自己が功勞章を受くることを辭退せられたるは、最も公明にして中正の襟懷を示したる美舉といふべく、且は立法府の神聖を保持し法理の嚴界を混同せざる明識者を選良したる同宗の進歩を畏敬す、管長親下の式辭宗會議長の答辭を得たれば左に載せて讀者の一覽に供せん

式辭

本職ハ宗憲第二十條ニ依リ日本ヲ以テ第六定期宗會ノ開會ヲ命ズ

今ヤ日進月歩ノ世運ハ物質的文明ノ缺陷ニ接着シテ心營問題ノ忽緒ニ附スベカラザルヲ知覺シ、求道ノ念勃然トシテ起リ敬虔ノ念油然而シテ涌キ宗教的大發展ヲ試ムベキノ機ハ既ニ熟セリ、是レ寔ニ慶スベキニアラズヤ、願ミテ宗内ノ現狀ヲ見ルニ僧俗同心ノ實現レ平和ト進歩トノ証徴ハ至ル處ニ發現シ、或ハ殿堂ノ改築トナリ或ハ講習會ノ開設トナリ又各教團ノ統合ヲ畫シ世道人心ノ指導ヲ計ルノ事業トナリテ人目ヲ新ニスルモノ妙カラズ是レ又慶スベキノ至リナラズヤ

明治四十二年五月一日

顯本法華宗宗會議長僧正成乾今隨

○天晴會第四例會

明治四十二年四月十日(第二土曜)午後四時第四例會を神田一ツ橋學士會に開催す當日の講師として第一席に文學士小林一郎氏は「解脱の二方面」と題して約一時間の講演を爲せり其要旨左の如し

予は少年時代より幾多の精神的變遷を経て今日日蓮上人を渴仰するに至れり予は嘗て大學にて哲學を専攻したるも自ら謂へらく僅々三年位の研究にて到底哲學を理解し盡す可きに非ざること及び哲學は如何様に疑ふ可きかと云へる疑問の方法を教ゆるも疑を斷ずるの學に非ざる事杯を承知し眞乎偉大なる安心は宗教に依らざる可らざるを信せり

現今に於ける哲學科學の潮流は二元論より一元論に進み宗教と衝突すと謂はんよりは寧ろ宗教の眞價値を發揮せんとするものなり、されど其學說多くは整正統一を欠き歸趨する所を見るは容易の事に非ず現今の子等の如き知識の程度にては偉人を透して見るを可なりと思ふ是れ予が日蓮上人を依怙とするに至りし所以なり

凡そ宗教的解脱の方法に二あり一は自己を偉磊ものと思ふて超越するものと一は自己を詰らぬものと思ふて解脱するものとあり禪宗の如きは前者にして淨

茲ニ本期宗會ニ於テハ宗制改正案トシテ學事ニ關スル方針ヲ定メ各寺ノ子弟ニ教育費ヲ補助シテ以テ研學ヲ獎勵シ、又タ布教條規ヲ改正シテ布教上ニ大發展ヲ畫シ、更ニ大講習會ヲ開テ廣ク世ノ渴仰者ヲ利潤セントス、又會計方案ニ於テハ特別宗費ヲ賦課シテ財團ノ完成ヲ促ス等幾多ノ改善ヲ加ヘ、又更ニ住職權ノ保障ヲ制限シテ宗務運用ノ道ヲ開キ以テ適材ヲ適所ニ置カントス、預算案ニ於テハ財團利金ト特別宗費トノ收入ヲ加ヘテ興學布教本山經營宗務運用權要寺院教會ノ保護ニ就テ多少ノ擴張ヲ期スルノ設計ヲ成サシメタリ、尙ホ議案ニ關スル詳細ノ説明ハ宗務廳員ヲシテ機ニ臨ンデ辨明セシムベシ、諸氏ハ慎重ナル審議ヲ遂ケ本期宗會ヲシテ後世ノ模範議會タラシムルノ覺悟ニ任シ以テ光明アル議決ヲ爲セ

明治四十二年五月一日

顯本法華宗管長大僧正本多日生

答辭

經卷相承ノ法燈ヲ承繼セル管長親下ハ本宗々憲ニ基キ議員ヲ招集シ第六定期宗會ノ宗會ヲ命ジ玉フニ佛祖ノ使命ヲ光顯スベキ經綸ノ抱負ヲ懸示シ之ヲ實現スベキ重要ナル議案ヲ交附セラル眞ニ感激ノ至リニ堪ヘズ、唯本員等ハ至誠佛子ノ本分ヲ守リ内宗門ノ實力ヲ察シ外社會ノ大勢ニ鑑ミ異体同心ノ祖訓ヲ体シ公明正大以テ宗運ノ發展ニ資セン事ヲ期ス矣

土眞宗の如きは後者なり前者を主觀的解脱、後者を客觀的解脱と稱す可し其に是れ消極的にして現實界を逃げ出さんとするもの、即ち前者は主觀的に自己の心の中へ、後者は客觀的に天國極樂の如き他世界中に逃げ去らんとするものなり予は二者共に首肯する能はず例せば債務者が酒を飲んで苦を忘れんと欲し或は笛を吹き畫を描きて以て一時氣を他に轉じて苦を忘れんとするが如し而も是れ眞の脫苦法に非ず眞の脫苦方法は借金を返済するに非ず即ち現實界に立ち日々の仕事に深意を見出し此の世に天國淨土を築き出すに如かず是れ積極的解脱なり

此點に於て日蓮上人が活動の舞臺を此の現實世界に定め自ら人間として人を導き佛になるなら共に佛に成らん地獄に行くなら共に地獄に行かんとして大に吾人衆生を指導誘掖せられしを感謝す云々

時に午下六點、晚餐の準備既に成るとの幹事の報告にして一同食堂に入り交酬會食の間に新入會員數名の紹介ありて後天理蓮門義立會などの批評論喧しき中に晚餐了り十分間の休憩中、幹事の提案にて左の件を満場一致で決議せり

(一)天下求道の士の爲に來る七月二十五日より約十日

開く事 間相州鎌倉龍口寺を會場とし天晴會夏期講習會を(二)大學其他の講習會は皆是れに合同を請ふ事

(三)講師は會員中の名士約十名を依頼する事
 (四)諸般の具體的方法は幹事及宗門諸雜誌社會合の上
 決定發表する事
 以上の決議終りて田中智學氏は起ちて「國力護持論」の
 題下に約一時間半に亘る講演を爲せり其大要を左に録
 せん

國力を以て法を護持するの意義を明にするは本題の
 主旨なり、惟ふに法界の當體は悉く是れ本佛緣起の
 活動なり、一切の事物は悉く本佛的に活動せざるべ
 からず即ち是に依て法の護持あり而して護持に(一)
 法護持(二)財護持(三)身護持(四)國力護持の
 四あり第四は特に法華本門の實義にして王法佛法に
 冥し佛法王法に合するの大事を顯現するものなり國
 力とは世々其の美を濟せる國民性、財富、殖産、兵
 力、教育、風土、國民の智識、無比の國體の如きを
 云ふ、此の如き力を具備せる國は能く法を護持する
 に適す法華經は法に依て國の眞價を顯はし又國に依
 て法を護せんとす神力品に十種の神力を現する中に
 十方の衆生をして娑婆世界に向て南無釋迦牟尼佛を
 唱へしむるは佛敎が初に現實世界を破壊して理想的
 西方極樂等を示し更に又理想を破壊して現實界の新
 風光を示せるものにして娑婆即寂光の實義こゝに存
 す釋尊は常に娑婆世界に在りと言ひ日蓮上人は凡夫
 が佛の事を爲せば其れて此世界が淨土に成ると言ふ
 而して此の現實の寂光土を築くには最上の法に依て

報 告

右報告ス

以上四十三名へ授與三等功勞章

顯本法華宗宗務廳

明治四十二年五月十二日詮衡委員會ニ於テ左記ノ者へ
 功勞章ヲ授與スル事ヲ決定ス
 坂本日桓、山岬日暲、板垣日暲、錦織日航、牧田日禱
 中田日蓮、小林日晷

以上七名へ授與二等功勞章

松木日新、小川日豊、日比野日暲、野老乾爲、横濱日
 禎、小高榮都、關田養叔、齋藤海叔、西山日諭、萩原
 啓門、竹内無着、笹川眞應、飛山日甫、今井日省、吉
 田純賀、木村乾中、森川會殷、森川寛行、大橋日義、
 窪田純榮、板木日導、國友日斌、龜崎日憲、廣山乾山
 石橋瑞殿、渡邊元教、山本道辨、上田智量、秋葉日度
 山名木信、渡邊乾航、大津賢淳、池澤暉玄、佐野日愷
 石川顯隆、木村義明、中田量叔、池澤快整
 川崎英照、出海俊義、夏目智誓、紀野俊耀

異想邪想一切を統一せざる可らず此の法を護持する
 國は實に此の日本帝國なり故に日蓮上人は一圓浮提
 第一の本尊此の國に立つ可し日本國は關浮提八萬
 の國にも超へたる國アかし」とて大法護持の靈國、
 統一の靈地と見たるなり統一無上の法に依て國の靈
 價を知り此の無上の國に依て法を護持し遂に世界を
 統一し以て國土と共に成佛し一天四海皆歸妙法、娑
 婆即寂光の天業を成就するは法界先天の約束なり吾
 人最終の目的なり云々
 是にて講演終了し、幹事は次回は五月八日(第二土曜)
 開催講演は三上博士及び脇田僧正に依頼する旨を報
 じて散會を告げたり
 此日の出席者は柴崎、松本、西谷龍頭(新入)、鈴木日雄
 藤崎、松村、井村、吉田珍、小笠原長生、山田、關田
 加藤文、加藤八、小泉、宮田(新入)、釋、風開隨、富田、
 稻田、柴田、小林、久野、岩田、吉田孟、五島、松岡、
 井上、丸橋、田中、山川(會員外)、林、國府等の諸氏に
 して此他會員外の聽講者兩三名あたり出席會員中近
 衛步兵第一旅團長林陸軍少將が肥馬に鞭ち金絲燦然た
 る軍服にて出席せしは一異彩なり



異 動 報 告

- | | |
|------------------|--------------|
| 死亡(一、四) | 中學校 菅本 日基 |
| 補學士(三、一) | 小林日至徒弟 高木 本順 |
| 轉任第八教區長漸寺住職(二、八) | 權少學統 上代 了察 |
| 死亡(二、一五) | 僧都 葦名 日幸 |
| 第二區總事撰舉監督 | 僧都 吉田 純賀 |
| 第六區管事撰舉監督 | 權大學統 稻葉 知明 |
| 第十二區管事撰舉監督 | 僧都 西山 日諭 |
| 補中學校(三、一五) | 權少學統 牧田 英長 |
| 叙權僧都(三、一五) | 大學統 田井 日晃 |
| 授與二等功勞章(三、一五) | 中學校 牧田 英長 |

| | | | |
|------------------|------------|---------------|------------|
| 叙權僧正(三,三五) | 僧都 坪永 日暨 | 命宗會理事(四,二) | 大學統 山田 日廣 |
| 授與二等功勞章(三,三五) | 同 同 | 命宗會書記(四,三) | 中學統 木村 義明 |
| 補中學統(三,三五) | 權少學統 武 聖麟 | 命宗會書記(四,三) | 權中學統 石川 顯隆 |
| 授與二等功勞章(三,三五) | 權大學統 高田 日暢 | 叙僧都(三,二七) | 權大學統 島田 顯恕 |
| 補權學士(三,三五) | 學士補 天崎 會温 | 授與二等功勞章(三,二七) | 全 全 |
| 補權大學統(三,三五) | 中學統 中山 智秀 | | |
| 補權中學統(三,三五) | 學士 鈴木 孝碩 | | |
| 授與二等功勞章(三,三五) | 同 同 | | |
| 授與三等功勞章(三,三五) | 大僧正 中田 日遠 | | |
| 授與三等功勞章(三,三五) | 權中學統 大川 日教 | | |
| 依願免八區妙行寺兼住(三,三五) | 大學統 今井 警敏 | | |
| 允許本宗僧員(三,三五) | 中重治郎 | | |
| 死亡(三,一〇) | 中學統 飯島 幸信 | | |
| 依願免四區圓成寺兼住(三,二七) | 大學統 川崎 泰秀 | | |
| 兼任四區圓成寺住(三,二七) | 學士 森川 秀光 | | |
| 改名通泰(四,六) | 豐田權右衛門 | | |

會津妙法寺本堂再建寄附金申込報告

(第二回)

| | | | | | | | |
|-----------|------|--------|--------|----------|------|-------|--------|
| 金五圓拾錢 | 第一教區 | 妙顯寺住職 | 芝沼 瑞良 | 金一圓八拾錢 | 第四教區 | 安樂寺住職 | 常 運 坊 |
| 金五圓拾錢(即納) | 全 | 本經寺住職 | 大根田 瑞海 | 金六圓也 | 全 | 道隆寺住職 | 大塚 賢秀 |
| 金拾圓也 | 全 | 烏山町一二番 | 鈴木 教嚴 | 金拾七圓二拾錢 | 全 | 飯尾寺住職 | 三須 教英 |
| 金參圓四拾錢 | 全 | 妙福寺住職 | 山口 宏雄 | 金拾三圓五拾錢 | 全 | 滿藏寺住職 | 木村 乾中 |
| 金參圓也 | 全 | 喜連川教誨所 | 須藤 南教 | 金九圓二拾錢 | 全 | 廣福寺住職 | 飯島 幸信 |
| 金五圓也(即納) | 全 | 常儉寺住職 | 小金井 明鐘 | 金拾參圓五拾錢 | 全 | 福庄寺住職 | 渡邊 乾航 |
| 金二圓也 | 全 | 本岡寺住職 | 長岡 教光 | 金拾圓也 | 全 | 圓藏寺住職 | 宇津木 玄英 |
| 金參圓五拾錢 | 第二教區 | 妙本寺住職 | 鶴澤 純貞 | 金二拾圓也 | 全 | 大正寺住職 | 白鳥 開安 |
| 金六圓也 | 全 | 金城寺住職 | 大塚 無偏 | 金二拾一圓五拾錢 | 全 | 寶泉寺住職 | 神田 日兆 |
| 金七圓也 | 全 | 常福寺住職 | 山形 眞瑞 | 金六圓也 | 全 | 龍鑑寺住職 | 山本 日董 |
| 金二圓也 | 全 | 行福寺住職 | 小池 辨碩 | 金參拾圓也 | 全 | 龍教寺住職 | 伊藤 寬隆 |
| 金二圓也(即納) | 全 | 本妙寺住職 | 朝倉 弘元 | 金一圓也 | 全 | 蓮福寺住職 | 齊藤 顯一 |
| 金四圓也(全) | 全 | 安立寺住職 | 中村 快念 | 金參圓也 | 全 | 妙藏寺住職 | 內田 專學 |
| 金五圓也(全) | 全 | 壽福寺檀家 | 吉澤庄三郎 | 金一圓也 | 全 | 東昌寺住職 | 常 光 坊 |
| 金二圓也(全) | 全 | 全 | 高山 善内 | 金二圓也 | 全 | 行光寺住職 | 高 勝 坊 |
| 金五圓也(全) | 全 | 全 | 澤 喜三郎 | 金拾七圓二拾錢 | 全 | 大樂寺住職 | 前田 日應 |
| 金一圓也(全) | 全 | 全 | 森 庄五郎 | 金八圓也 | 全 | 滿福寺住職 | 成島 泰行 |
| 金二圓也 | 全 | 全 | 森 彦太郎 | 金拾圓也 | 全 | 圓立寺住職 | 倉上 暲榮 |
| 金二拾圓也 | 第三教區 | 本源寺住職 | 秋葉 日虔 | 金拾一圓也 | 全 | 光本 會龍 | 光本 會龍 |
| 金六圓六拾錢 | 全 | 光明寺住職 | 笹川 日方 | | | | |
| | 全 | 常光坊住職 | 稻子 暲義 | | | | |

統一

第七十二號

民國十一年七月十四日出版

(一) (二) (三) (四) (五) (六) (七) (八) (九) (十) (十一) (十二) (十三) (十四) (十五) (十六) (十七) (十八) (十九) (二十) (二十一) (二十二) (二十三) (二十四) (二十五) (二十六) (二十七) (二十八) (二十九) (三十) (三十一) (三十二) (三十三) (三十四) (三十五) (三十六) (三十七) (三十八) (三十九) (四十) (四十一) (四十二) (四十三) (四十四) (四十五) (四十六) (四十七) (四十八) (四十九) (五十) (五十一) (五十二) (五十三) (五十四) (五十五) (五十六) (五十七) (五十八) (五十九) (六十) (六十一) (六十二) (六十三) (六十四) (六十五) (六十六) (六十七) (六十八) (六十九) (七十) (七十一) (七十二) (七十三) (七十四) (七十五) (七十六) (七十七) (七十八) (七十九) (八十) (八十一) (八十二) (八十三) (八十四) (八十五) (八十六) (八十七) (八十八) (八十九) (九十) (九十一) (九十二) (九十三) (九十四) (九十五) (九十六) (九十七) (九十八) (九十九) (一百)